

西湖図、秋月等観（1496 年）作

中国杭州にある西湖は、唐の時代（618-907）から中国の伝説や絵画、文学に登場する場所である。中国を訪れた日本人は、旅先で杭州を訪れることが多く、中国の自然美を象徴する湖として、日本の詩人や画家、貴族の心を捉えた。

本図は、1496 年に描かれた掛け軸で、現存する日本最古の西湖の絵である。雪舟等楊（1420-1502）に師事した秋月等観（年代不詳）が描いたものである。

掛け軸の左上には、「杭州西湖図、弘治九年（1496）三月三日、北京の会同館にて描かれた」と記されている。西湖を訪れた際に写生し、その後、中国の絵画を参考にして完成させたようだ。

橋の下には「六橋」、中央奥の北高峰と南高峰に挟まれた小さな建物の上には「靈隠寺」と、それぞれの地名が書かれている。まるで地図のような湖のリアルな描写である。このリアルさは、江戸時代（1603-1867）に西湖を描こうとした後世の日本画家にとって、信頼できる参考資料となった。